

左京区保護司会会長賞・京都府推進委員会委員長賞

愛情のバトン

京都市立洛北中学校三年 尹 輝相

僕は人を殴ってしまったことがある。気がついたら手が出てしまっていた。相手に嫌な態度をされて、自分が抑えきれなかった。その後、先生に呼び出されてしまった。「なんで殴ったりしたんだ」と先生はいう。「あいつがバカにしたような態度をしたから」と僕は答えた。「たしかに相手も悪いけど、殴るのは良くないよな」と叱られた。お母さんにも連絡がいつていたようで、学校から帰ってまた怒られた。たしかに、殴ったのは僕だ。でも、僕をバカにする相手の態度は許せない。その時、僕は手を出したことで怒られることに納得がいかなかった。

その後、この気持ちが変わることがあった。夏休みの宿題で「社会を明るくする」の作文の参考として先生が教えてくれた鉄拳さんの動画を見たことだ。動画の少年は、両親がけんかをしたことで、不安な気持ちになって非行に走った。タバコを吸ってみたり、悪い仲間とつるんだりするなかで、人を襲おうとしたところを警察に捕まり、保護司さんの助けのもと社会に復帰することができた。

僕はこの動画を見て、愛情をもって接してくれる大人の存在が大事なのだと感じた。僕が殴ってしまったて怒られたときは「なんで怒られないといけないんだ！」と納得がいかなかったが、考えてみれば嫌なことをされたからといって手を上げるのはやりすぎだ。怒られても仕方がない気がする。先生や母さんが僕を叱ったのは、僕を大切に思ってくれているからなのだと思うようになった。

もし僕に怒ってくれる人がいなければ、僕は嫌なことをされるたびに殴ってしまう人になっていたかもしれない。僕が大人になって誰かを殴ってしまったら、僕は捕まってしまうかもしれない。そんなことが起こらないためにも、お母さんや先生は怒ってくれたのだと思う。僕のことを一番に考えて愛情を持って叱ってくれたのだ。

世の中にはそういうことをしっかり教えてくれる大人が周りにいない

子どももいるだろうし、鉄拳さんのパラパラ漫画の少年のように身近な大人を信じるのができなくなって非行に走ってしまうような子どももいるはずだ。子ども達が何か間違ったことを起こしてしまった時に大切なのは、愛情を持って接してくれる大人の存在だと思う。親や先生は身近な大人だが、動画の中に出てきた保護司さんも、非行をしてみました人たちに愛情をもって接してくれる大人だ。そういう存在が僕たちみんなに必要なと思う。とはいえ、みんながみんな、そのような大人に出会えるとは限らない。どうすれば、みんなが愛情を受けられるようになるかはこれからの課題だろう。

いつかテレビで深夜に繁華街に集まる若者たちのニュースを見た。寂しさや不安を掲げて、みんなで集まっているのだという。社会の悪だとして、その若者たちはその場所から追い出されてしまっていた。でも、ニュースで見た若者たちに必要なのは、繁華街から追い出されることじゃなくて、愛情を受けることなのだと思う。たしかに、若者のたまり場は怖くて危険な感じがする。だが、それは彼らが十分な愛情を受けていると感じられていないからだと思う。

僕は社会に生きる人々がみんな、「誰かに愛情を持って接する人」になればいいと思う。みんなが愛情を持ち、みんなが愛情を受けるのだ。そんな愛情の連鎖が人々の孤独や不安を和らげ、非行に走ったり、犯罪に手を染めたりすることを予防する。そして、誰かがもし、悪いことをしてしまったときに社会に復帰する道も開くことができるように思う。

ここまで僕たちには愛情を持って接してくれる大人が必要だと話してきたが、大人になっても愛情を持って接してくれる人の存在は必要だろう。ついカッとなったときにだめてくれる友達、落ち込んでいるときに話しかけてくれる友達、困ったときに相談に乗ってくれる友達、大人にとつてのそういう存在に僕たち自身もなることもできるはずだ。僕は今年で十五歳になった。まだまだ子どもだけど大人たちを支えることができるだろう。先生や母に愛情を伝えるのは恥ずかしいけど、悩みや話を聞いてあげることから始めてみようと思う。

僕が人を殴ってしまったときに僕を叱ってくれた先生やお母さんのよ

うな存在にみんながなる。追い出すんじゃないなくて、叱って、愛情を伝えるのだ。社会に生きるみんなが愛情を誰かに与える。そして、そのバトンを繋いでいく。これが僕の考える「社会を明るくする運動」だ。